

Railway Photo × Epson Printer



プリントした作品こそが鉄道写真の終着駅 写真家が選ぶ 信頼の置けるプリンターとは

プリンターの存在は、優れた作品づくりにおいてどのような位置づけにあり、
厳しいプロの期待にどう応えているのだろうか。鉄道写真家中井精也氏に聞いた。

中井精也 なかい・せいや

1967年東京都生まれ。鉄道の車両だけにこだわらず、鉄道にかかわるすべてのものを被写体として独自の視点で鉄道を撮影し、「ゆる鉄」など新しい鉄道写真のジャンルを生み出した。2004年春から毎日1枚必ず鉄道写真を撮影するブログ「1日1鉄！」を継続中。広告、雑誌写真の撮影のほか、講演やテレビ出演など幅広く活動している。株式会社フォートナカイ代表。



鉄

道車両そのものはもちろんのこと、「ゆる鉄」に代表される鉄道を取り巻くさまざまなシーンを収めた作品づくりで、その領域を広げてきた中井精也氏。作品を伝えるうえでなくてはならない存在だという中井氏が選んだプリンターがエプソンのプロセ

レクションシリーズだ。なかでもA3ノビ対応の「SC-PX5VⅡ」は、ヘビユーザーとして常用している一台だという。

「エプソンのプリンターはそれぞれ大きな特長を持っていますが、私が所有しているプリンターの中で使用頻度が最も高いのが『SC-PX5VⅡ』で

す。これは顔料インクを採用したプリンターの上位モデルです。僕はマット系の用紙、とくにエプソンのウルトラスムーズファインアートペーパーが好きなのです。この紙と顔料インクとの相性のよさが気に入っています」(中井氏)

新Epson UltraChrome K3インクによって極められた、黒の深みによる優れた色の表現力は同機の大きな魅力だという。

「以前のモデルから使い続けていますが、重厚感が増して、しっかりと引き締まった黒になったのがこのプリンターの強みですね。実は黒がぐっと締まることによって、他の色も鮮やかに表現できるのです。ですから、作品全体の仕上がりが具合がアップします。今ではもう、テストプリントの必要がないほど、一発で望みどおり、期待を超えるほどの色が出るので助かっています」(中井氏)

同機は作品のクオリティアップと効率化にも大きく貢献しているようだ。

「以前はどう調整したらプリント時に好みの色が出るか、モニターを見ながら黒が引き締まるように調整をするなど、プリント前の作業が多かったのです。求めているイメージどおりの作品がすぐに見られるのはうれしいですね」(中井氏)

また、プリンターによっては、マット系の用紙にインクがのりにくいケースもあったという。顔料インクを搭載した同機とウルトラスムーズファインアートペーパーを使うようになってからは、そのような心配は不要と中井氏は断言する。

作品をプリントしたときにどのような仕上がりになるか、そのイメージは撮影時に作り上げられるのだという。「僕は展示会向けに撮影することが多く、自分でプリントすることがよくあります。鉄道ふうには、プリントした作品が終着駅なのです。ですから、撮影の段階でどんな作品に仕上げようか、プリント時のことも想定して臨みます。このシーンなら光沢かマット系

デジタル時代だからこそ プリント時の 用紙セレクトがキモ!

デジタル時代になったことで写真をプリントしない人が増えている。電子モニターで見ただけではなく、きちんとプリントすることで写真としての価値を高めてくれる。そこで大事になってくるのが用紙のセレクトだろう。用紙が変わると写真の印象もガラリと変わる。だからこそプリントする楽しさもそこにあるのだろう



撮影時からプリントをイメージ
思いどおりの仕上がりがうれしい



か、用紙の選択やプリント後の加工もイメージして撮影することが多いですね。現場で追い込んでいかないと、撮った気がしないというか落ち着かないのです」(中井氏)

撮影現場ではホワイトバランスやコントラスト、仕上がり設定、構図まですべて含め、完全なイメージを作り上げていく。

「僕は現実の色にはこだわらないのです。カメラは目の前にあるものをそのまま捉える機械ではあるのですが、それだけではありません。自分の思いや想像した色も加味して、現実とは違う美しさを求めることにも全力を尽くしたいのです。例えば、ゆる鉄の世界観を表現するには、柔らかな温かさを持つマット系の用紙を想定して撮影します。自分の中できつちりと作り上げたイメージが、プリント時にそのまま表現できたとき、このプリンターの実力を感じます。また、あえて光沢紙を選択してみることで、新たな作品が生まれることもあり、表現方法に大きな幅があることを実感します」(中井氏)

プリント前の作業としては、マット系の用紙でプリントする場合は少し強めにシャープネスをかけることがある程度で、あとはプリンターに任せておくだけでほぼ思いどおりの仕上がりが



撮影者の思いを伝えるのが写真プリントで初めて見えるものも

得られているという。鉄道写真家として、プリントした作品を終着駅と表現する中井氏の思いはさらに深いところにある。

「写真はやはり、撮影者の思いを伝えることに大きな意味があるのです。撮影した作品をハードディスクに閉じ込めておくのではなく、多くの人に伝えてほしいと思います。SNSにアップするのも楽しいことですが、Webに上げた作品は数時間後、数日後には過去のものとなっていきます。紙にプリントすることで作品として残り、展示するといつまでもより多くの人に伝えることができるのです」(中井氏)

中井氏がゆる鉄の中で表現しているものは、鉄道にあまり興味を抱かない人さえも魅了し、やがて鉄道写真のフィールドに引き込む力を持っている。「プリントすることで初めて見えてくるものがあります。新たな楽しさも生

中井精也氏が愛用するプリンターと用紙の組み合わせはこれ!



SC-PX5V II
Epson UltraChrome K3インク搭載
A3ノビ対応



UltraSmooth
Fine Art Paper



写真用紙 クリスピア
高光沢
A3ノビ対応

まれると思います。撮りためるだけで終わってしまい、その世界を知らないのは、もったいないことです」(中井氏) 中井氏にとって「SCRIPPIA V II」は、どんな作品づくりにも信頼してプリントを任せられる、頼もしいプリンターだという。

A3ノビ対応の染料6色モデル

他にもまだある! 低インクコストでたくさんプリントができるモデル



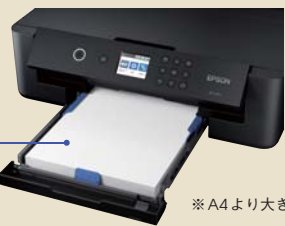
EP-50V NEW

省スペース染料系インク搭載

大きく引き伸ばしたいのに、インクコストが気になって躊躇する人は多いだろう。「低インクコストで気兼ねなくたくさんプリントしたい。しかも高画質で」というユーザーの声に応える形で登場したのがColorio V-editionシリーズだ。L判1枚当たり約12.7円(税別)でプリントできるので、作品はもちろんテストプリントから人に贈るプリントまでためらうことなく出力できるだろう。そして染料インクならではの光沢感を得られること。Epson ClearChrome K2インクの6色インクを採用することで鮮やかな色彩と表現力のあるグラデーションを描くことが可能だ。2つのブラックインクに



A3ノビ出力に対応しながらボディは幅476mm×奥行369mm×高さ159mmで、とてもコンパクト。



用紙の交換や補給が簡単。置き場所に困らないトレイ式の前面給紙。普通紙なら200枚、写真用紙なら50枚セットできます。

※A4より大きな用紙は背面給紙になります。

普通紙 200枚
写真用紙 50枚

パソコンなしでメモリーカードから直接プリント、さらにコピーもできるColorio V-editionシリーズ



EP-10VA A3対応モデル



EP-30VA A4対応モデル

よって、階調豊かな深みのあるモノクロ写真もプリントすることができ。そしてコンパクトなデザインであることにも注目したい。従来モデルに比べて大

幅な小型化を実現。なかでも最新のEP150Vは、A3ノビ対応にもかかわらず、プリント時の操作音も静かなのでファミリーユースにも重宝するだろう。

フォトイベント「それいけ! 写真隊」開催

「それいけ! 写真隊」は「写真をカタチに」がテーマのフォトイベント。「展示する」「挑戦する」「まとめる」「贈る」の写真体験を通じて作品作りの幅が広がります。1/20(土)静岡、ツインメッセ静岡・2/10(土)広島、広島県立広島産業会館。詳しくは<http://www.epson.jp/soreike/>で確認を。